

「実験データを正しく扱うために」

化学同人編集部 編

119ページ，定価1500円（税抜）
（株式会社化学同人，2007年12月20日発行）

学生時代に化学実験をされた方の中には、その本の色から通称“赤本”・“青本”とよばれる参考書を手元においていた方もいらっしゃるかと思います。ここでいう“赤本”とは「実験を安全に行うために」という実験に際しての危険な物質や操作，対策や処置方法が書かれたもので，“青本”は「続・実験を安全に行うために」という実験操作を安全に行うための基礎が書かれているもので，それぞれ1975年と1977年の第1版の発行以来，時代に合わせて版を重ねていった定番参考書になります。

今回ご紹介する「実験データを正しく扱うために」は(本の色から“緑本”と通称すべきものになるのでしょうか?)，このシリーズの30年ぶりの続編となりますが，実験の操作や安全面ではなくデータの取り扱い方に関する記載がメインとなります。

実験操作の参考書のシリーズであることから，化学寄りの内容になってしまいますが，SI単位系，単位の記述，物理量の測定(定規やピペット，ガラス体積計の扱い方まで)などの非常に初歩的な部分の説明から，採取したデータの具体的な扱い方や，その意味合いまで解説されています。繰返し測定による平均や標準偏差などは通常は普通に行われている基礎的なものですが，測定値の確からしさや誤差法則，検定と異常データの棄却法，誤差の伝播などが例を挙げて書かれています。途中様々な公式が出てきて，とっつきづらい面もありますが，普通の統計関連の参考書よりも平易な内容となっていると思います。

本書自体はページ数も少なく，なるべく平易な表現としているため，物足りない記載も見受けられますが，巻末には本書を執筆する際の参考図書がリストアップされて簡単な解説も書かれており，データを扱う方法について更に深く理解するための書籍を知る上での一助となるかと思えます。

本書は，シリーズの位置づけから入門書の部類に入るものですので(特に数値を扱いはじめる学生の方に参考にしていただいてもいいかと思いますが)，熟読する類のものではありませんが，実際に数値を扱う際のちょっとした確認のために傍らに置くような参考書としてお勧めしたいと思います。

(柴田科学株式会社 丸島 渉)

